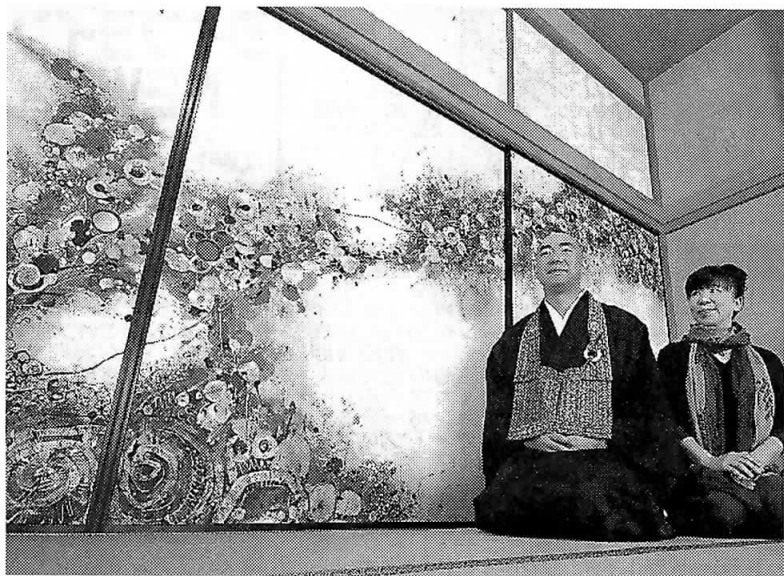


禅寺に抽象画のふすま絵

文化
&
アート



住職赤星隆誠さん(左)と美術家荒井恵子さん—船橋市西船6丁目の宝成寺

船橋市西船の古刹、茂春山宝成寺にこのほど、市内の現代美術作家が描いた墨絵の襖絵が奉納され、19日開眼供養の式があった。一様ではない人の仏に対する思いを表すのに抽象画こそふさわしい、とする住職が制作を依頼、作家は2年がかりで完成させた。

船橋の宝成寺 現代美術家が墨絵

住職「解釈の自由さふさわしい」

縦180センチ、横135センチの襖絵12枚を制作したのは同市本郷町に住む荒井恵子さん(49)。墨絵の抽象画などを描く現代美術作家で船橋に住んで約30年。2年前からはアトリエも市内につくった。

宝成寺は450年以上の歴史を持つ曹洞宗の禅寺。

京成西船駅やJR西船橋駅からもそう遠くない。由緒ある古いお寺と現代美術が結びついたきっかけは、宝成寺の住職赤星隆誠さん(37)が3年前から始めた「たから塾」だ。

「古来お寺は地域の役所、学校、病院、そして信仰の場だったが、いつの間にか門を閉ざしてしまっただ」と赤星さん。寺周辺は宅地化が進み、新旧住民が混在するが交流する機会も少ない。人が集う場を寺が作りたいと「たから塾」を開いた。「坐禅の会」「むかしあそび教室」「表現教室」と並び、「造形教室」

をつくった。ここで講師をしたのが荒井さんだった。

寺の先達、二十五世、二十六世のそれぞれ五十回忌、二十三回忌に当たる節目の今年、併せて大きな襖絵を新装しようと、荒井さんに制作を依頼したのが2年前。

赤星さんは、山や川が描かれた絵ではなく、鑑賞する人がそれぞれに解釈ができる抽象画こそ禅寺にふさわしいと考え、抽象画が持ち味の作家である荒井さんに任せた。「内面にあるが見えない、つかみどころのないものを形にするのが自分の仕事」という荒井さんは、禅寺は「自分と近いところにある」と考えるようになり、制作に心血を注いだ。4月初めに完成した。

19日、本堂では襖絵の奉納開眼供養が執り行われた。その後客殿では「荒井恵子展」が併催され、掛け軸などの作品が展示されている。27日まで。(春山陽)